



インターンシップの夏

インターンシップや実務実習は、「自分の学ぶ学問が社会の中でどのように生かされているのか」、そして「働く」とはどういうことか」を身をもって理解する、またとない機会です。夏の長期休業を利用し、関心のある業界や企業のプログラムに参加した塾生も多かったのではないのでしょうか。自身の「成長」と「発見」が詰まった経験となるよう、まずはしっかりと目的意識を持って取り組むことが重要です。

就業体験を通じて、自らを高める

就職が厳しい時代を背景に、インターンシップへの注目が高まっています。ある統計によると、全国の大学生のうち参加した経験がある人は約2割。義塾では4割近くが何らかのインターンシップを体験しているようです。



インターンシップの定義は「学生が

在学中に、企業等において自らの専攻や将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」です。現在学んでいる学問分野の理解を深めたり、将来働きた

い業界の知識を身につけたり、仕事で必要とされるスキルの一端に触れたりすることを目的に、自主的に応募し、参加することが前提です。例えば、授業

でマーケティングや公共政策に興味を持った塾生が、実際に企業のマーケティング現場や官公庁で社会人とともに

働き、授業で学んだ理論の実践上の問題をより深く理解する、といった経験をすることもあてはまっています。その結果、

将来のキャリアとして、マーケティングに積極的な企業や官公庁での就職をより強く希望することになるかもしれません。

内容、期間もさまざま インターンシップ

塾生の場合、約4割が卒業までに何らかのインターンシップを経験しているようです。自身の学問分野や、目指す業界に関する知識や経験を得たいという意識が高いことがうかがえます。今年5月下旬、学生部が開いたインターンシップガイダンスには、約600名もの塾生が参加しました。実際に取り組むのは3年次が圧倒的に多く、参加者はその体験におおよそ満足しているようです。

参加方法は、企業・団体に直接応募する（自由応募型インターンシップ）が主流です。希望者は、企業のWebサイトや大学のインターンシップ情報等を参照し、先方へ直接応募することになります。その他に、官公庁や地方自治体、一部独立行政法人などに大学を通して応募する（大学公募型インターンシップ）や、学部などが正課の一環として単位認定する（正課型インターンシップ）もあります。

期間は3日以上、2週間未満のものが多いのですが、仕事の実際について体験したり、社員とともにプロジェクト

トに取り組んだりする、本来の意味での「就業体験としてのインターンシップ」は、5日以上のものでされています。最近では、実際の業務から離れて、グループワークで企業の課題や戦略を考える形式のものも増えていきます。半日〜1日だけというものも多く、その内容は事業所の見学や社員の講話が主で、就業体験というよりは企業説明会的なものになりがちです。

就職活動とは切り離して考えよう

昨今、大学生の間ではインターンシップに参加することを当然視する向きもあるようですが、まずは目的意識を持ち、それに沿った内容のものかどうか、そこで何を学びたいのか、しっか

りと考えて応募しましょう。また、インターンシップはあくまでも実際の就職活動と切り離して考えるべきでしょう。単に「就職活動に有利になりそう」と考えて、学業や課外活動を犠牲にしてやみくもに取り組んでも、せっかくの貴重な夏休みを無駄にしかねません。

「就業体験としてのインターンシップ」は、企業の負担が大きい分、参加者が限られており、そこに多くの学生が応募します。その選考に通らなくても、過度に悲観して焦る必要はありません。インターンシップ経験の有無にかかわらず、まずは自身の学業や課外活動を実りあるものにした塾生ほど、おのずと就職活動もうまくいっているようです。

インターンシップ 参加上の注意点

学生であっても、インターンシップ中は企業・団体の一員としての自覚が必要です。社会人と同じマナーやルールを理解して、慎重に行動しなければなりません。遅刻・欠勤はもちろん厳禁ですし、企業内や業務上で知りえたことに関する守秘義務も守らなくてはなりません。

賠償責任保険がセットになっているインターンシップ保険にも必ず入ってください。不注意で受入れ先の機械を故障させたり、物品を破損してしまった場合に損害賠償請求をされることも、あり得たくはありません。

海外でのインターンシップに参加する場合は、より一層の注意が必要です。外務省Webサイトをはじめ、さまざまな角度から事前の情報収集に努め、受入れ先とも緊密に連絡を取り合っテリスクの低減に努めましょう。また、海外への渡航に際しては、所属キャンパスの学生生活関係窓口に「海外活動願（個人）」を必ず提出してください。



2年の夏に体験する「社会との対話」

授業の段階は大きく分けて3つ。春学期に行う事前学習、夏休み中のインターンシップ、そして秋学期に取り組む事後のまとめです。じっくりと時間をかけて指導を行う、授業の内容とは？

7月16日火曜日。日吉キャンパスの教室で、商学部の「短期インターンシップ科目」社会との対話」の授業が行われていました。

教壇でマイクを握っているのは、商学部2年生の増田^{ますだ}淑乃君です。夏休み前にインターンシップで派遣される企業について、事前に調査してまとめた「事前研究レポート」をプレゼンテーションしているのです。増田君の研修先は、飲食店情報のポータルサイト運営と、飲食店経営のコンサルタントを行っている会社です。

「……以上の調査をもとに、会社がさらに成長するためには、新規加盟店を増やすことと、料金設定の高い販促コンサルタント契約をより多く獲得することが重要と考えます。そのために必要なのは……」

増田君の説明が終わると、クラスメイトからの質問が始まります。

「……明快な分析とわかりやすい説



明でした。しかし、コンサルタンとしてどのようなノウハウを持っているのかの説明がもっとあれば……」

活発な意見の交換が行われ、担当教員の指導を受けたりしながら、増田君の事前研究レポートは、さらに磨かれていきます。研修先への派遣直前のこの日、身だしなみのチェックもかねて全員がスーツ姿で参加し、教室にはリラックスした緊張感が漂っています。

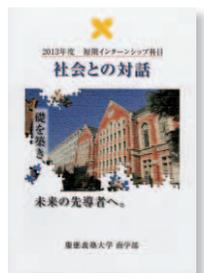
商学部がこの授業をスタートさせたのは、まだ日本でインターンシップと

いう言葉が一般的になる前の1999（平成11）年のことで、今年で15年目を迎えます。

「商学はもともと社会に開かれた学園のひとつです。学外での就業体験を中心に据えたこの授業は、学びと社会との関わりをかたちに現した、商学部らしいものといえます。授業は2年生を対象とし、早期の就業体験の機会を提供しています。体験を3年次以降の勉強に生かすことができるとともに、早い段階で、働くこと“の目的意識を明確化し、職業観の形成などに役立てることができると考えています」（商学部 大矢^{おおや}玲子^{れいこ}教授）

地方の中小企業からNPOまで、多彩な受入れ先

実際にインターンシップに取り組むのは夏休みの2〜3週間ですが、それと同様に、あるいはそれ以上に重要なのが、事前学習と、事後のまとめでの学びです。





4月の始業に先立ち、6名の担当教員が2〜3月の段階で、学生30名分の受入れ先を決め、研修内容を確定させます。研修先は、首都圏の企業だけでなく、学生の目が向きにくい地方の小企業や地方自治体、NGO、NPOなど多岐にわたります。4月にガイダンス、そして学生と研修先のマッチングを行い、5〜7月は事前学習の期間で、学生は研修先のことを自ら調べて、レポートを作成します。

「メディアセンター（図書館）での調べ方、データベースの活用などを教え、学生には可能な限り踏み込んだ調査をさせます。企業の歴史、業務内容、財務状況、競合状態などを調べて

履修生の声

「僕は一般企業ではなく、大田区の障害者支援センターで研修をします。こういった施設でのインターンシップは、この授業でなければなかなか経験できません」

「日本のモノづくりの現場を見て、じっくり考える機会を持ちたくてこの授業を履修しました。研修先は伝動ベルト等を製造するメーカーの神戸工場です」

「レポート作成ノウハウや、パワーポイントの使い方が学べるのも大きな魅力。2年からしっかり勉強するぞ、と決意しての選択です」

「レポートやプレゼンのフィードバックをクラスメイトからもらえるのですが、同世代の指摘がとても参考になります。先輩のプレゼン指導もありがたく、クラスの縦のつながりを感じます」



は、業務を経験しながら、研修テーマに取り組みます。インターンシップ体験後の秋学期には、最終報告会に向けてのプレゼンテーションの準備と、最終報告書の作成を行います。

「12月に、研修先の方を招いての最終報告会と懇談会を行うのですが、報告のみならず、受入れ先への感謝を伝える心のこもった学生たちの言葉などを聞くと、彼らがこの短い期間で格段に成長していることに驚きます。ちょっと乱暴な言い方ですが、学生を学外に放り出して、社会の空気を吸わせることの大切さがよくわかります」（商学部 松浦壮准教授）

インターンシップでの就業体験、企業体験は、まさしく「社会との対話」です。その経験を3、4年生での学びに生かせるところに、この授業の価値があります。

いく過程で、企業の実態がリアルに見えてくると、たとえば、どうすれば利益を上げられるのかなどと考えるようになります。その考えをさらにプレゼンでクラスメイトとディスカッションしながら高め、受入れ先に見てもらっても恥ずかしくない事前研究レポートを作成します。この段階で学生の情報リテラシーも必然的に高まります」（商学部 大野由香子准教授）

商学部生のインターンシップのために多大な労力を注いでくださる受入れ先で、充実した研修を行うには、学生の側も十分な事前準備が必須です。受入れ先で



知識が力になるのが現場体験

正課に位置づけられ、資格取得に向けた「実務経験を積むこと」が目的の実務実習。就業体験を目的とした、いわゆるインターンシップとは性質が異なりますが、現場で業務に取り組むという点では同じです。数ある実務実習のなかから、文学部が開講する「図書館実習」の経験者に話を聞きました。

司書の資格取得に際して、実務実習

は一般的には必須ではありません。しかし、義塾の文学部図書館・情報学専攻における資格取得では、より高度なスキルを身につけるために、図書館での実習を必修としています。現在、公共図書館、大学図書館、学校図書館、専門図書館（主に企業の資料室）の19館が実習先に指定されています。

昨年度まで「図書館実習Ⅰ・Ⅱ」の授業を担当していた岸田和明教授は、「座学で学んだ知識や技術を、現場で具体的に用いてみることで理解が深まり、その後の勉強への姿勢も変わります」と、実習の意義を説きます。

昨夏、実習に参加した佐藤寛子君も、「授業ではわかりにくかったことも、図書館で実際に使われている場面に出会い、こういうことだったのかと、すんなり理解できました」と話します。

佐藤君の実習先は横浜市立図書館。2週間の日程のうち、3日間は中央図



文学部 図書館・
情報学専攻4年
佐藤寛子君
さとうひろこ



文学部
岸田和明教授
きしだかずあき

書館で公共図書館の役割などについてレクチャーを受け、次いで港北図書館で、司書業務に取り組みました。

「公共図書館は、本場に幅広い人々が利用する、地域に密着した大切な施設だとあらためて思いました。本の貸出・返却を受け付けるカウンター業務だけでなく、蔵書の目録データづくりや、書庫の整理、調べ物の相談に応じるレファレンス業務も経験しました。印象深かったのは、幼児への絵本の読み聞かせ。率直な子どもへの反応が新鮮でした。司書の仕事は、利用者喜んでもらってこそものだと実感した実習でした」

授業としての インターンシップ・実務実習

2011（平成23）年度の調査によれば、義塾の大学学部において、授業として開講されたインターンシップ・実務実習科目は、20以上に上ります。登録者数はのべ2500名超で、学部生の11人に1人が何らかの科目を履修したことになります。ただ、その多くは医療系学部における必修の実務実習であり、重複している塾生が多いのが実態です。

医学部の「外科学」や看護医療学部の「急性期ケア実践」、薬学部の「病院実務実習」など、実践的な授業が開講され、実地で専門的な技術と知識の習得に取り組んでいます。医療系以外では、上記の「図書館実習」のほか、教職課程の「教育実習」も実務実習と位置づけられ、全塾でのべ140名ほどの学部生が履修しました。

インターンシップとしては、4、5ページで紹介した商学部の「社会との対話」のほか、総合政策学部・環境情報学部で「企業インターンシップ」「非営利組織インターンシップ」などが開講されています。



職場体験で「働く」ことがイメージできた

昨年、夏休みを利用して横浜市が実施する2週間のインターンシップに参加。仕事と会社を見る目が養われ、就職活動に落ち着いて取り組む余裕ができた。



環境情報学部4年
あまがすり さ
天春里咲君



生まれ育った横浜が大好きで、市のインターンシップに

応募し、栄区役所の区政推進課でお世話になりました。職場では名刺まで用意してくださり、「学生だから」とお客様さん扱いはされることがなく、担当業務を、私をメインにして任せてもらったのが驚きでした。

区の広報テレビ番組制作では、取材先との打ち合わせ、制作スタッフさんとの調整、台本作成に区長への報告など、自分が中心となり取り組みました。

もちろん、職員の方は熱心に指導してくださり、その上で私の主体性に基づいて行動するよう、見守ってくれました。

そのほか、庁舎の「総合案内」窓口應對にも従事したのですが、「役所にみえる方は、問題を抱え困っていらっしやることが多いから、まずは安心させる應對を」と教わり、行政の仕事の本質を垣間見た気がしました。

公務員受験も考えましたが、最終的には民間の通信会社へ就職することに決めました。インターンシップを通じて、「働く」とはどういうことなのか、具体的にイメージすることができたのは、とても大きな収穫でした。毎日定刻に出勤し、会議に参加し、段取りを決めて仕事をし、昼休憩があつて、また仕事。必要なら残業もする。そんな一連の動きを間近に見聞するなかで、「こんな雰囲気職場がいいな」とか、「結婚・出産といったライフプランを支える福利厚生はどうなっているか」といったことにもまで考えが及ぶようになり、会社選びにとっても役立ちました。

Column インターンシップ実施企業の担当者へ聞く



株式会社 三越伊勢丹
ヒューマン・ソリューションズ
人材サポート事業部
採用グループ
さくらい まりえ
櫻井眞理恵さん

三越伊勢丹では毎月さまざまなインターンシップを開催しています。夏期の期間は3週間で、約50名にご参加いただきました。慶應義塾大学からも、毎回多くの学生さんが参加されています。お買場(売り場)での接客販売のほか、

商品の買い付けや企画・開発を担当する商品部、広告の企画・制作やPR業務を担当する宣伝部の研修を通して、販売だけではない百貨店の仕事の広がりを知っていただきました。その他にも、社員のとの懇親会やグループワークを通して、さまざまな気づきを得る機会をたくさん用意しています。研修生からは、自分の長所や課題点について改めて気づくことができた等の声をいただいております。その後の就職活動にも役立っているようです。

皆さんには、「働く」ということはどういうこ

とかを理解してもらいたい、そして何より百貨店の仕事の多様性を知ってもらいたいと考えています。その取り組みを支えているのは、常に新しいことにチャレンジする、当社の企業風土です。インターンシップを実施することで、学生さんだけでなく、受け入れる側の社員や職場にも良い影響があると考えています。

学生さんには、とにかく自分で考え、行動することを期待しています。前のめり“ながら”で良いので、存分に自主性を発揮してください。

